

県内の薬局薬剤師を対象に フィジカルアセスメント講習会開催

- 県内の薬局薬剤師を対象とした「フィジカルアセスメント講習会」を県薬剤師会と共催
- 実技に重点を置いて1回2テーマを5回シリーズで10テーマを履修
- フィジカルアセスメントは薬効と副作用を見極める薬剤師の実践力アップの第一歩

重み増す薬剤師の役割

チーム医療が進み、さらに高齢化に伴う在宅医療が広がる中、薬剤師が果たす役割が大きくなっている。処方箋に基づいて調剤するだけでなく、患者の服薬指導、副作用の早期発見などのマネジメントが求められる。「モノから人へとと言われるように、薬剤師業務は時代とともに変わり、人との関わり合いが重視されています。われわれはそれに対応していかないといけなくなっています」と、大分大学医学部附属病院副病院長で教授・薬剤部長の伊東弘樹氏は話す。

伊東氏は「当薬剤部では、薬剤師はまずジェネラリストであるべきだと考えて養成しています。その上でがんや感染症など専門を持つように指導しています」という。日本医療薬学会の認定薬剤師やいくつかの専門薬剤師の認定を取得するには、論文実績が要件となる



大分大学医学部附属病院
副病院長 教授・薬剤部長
伊東 弘樹 氏

ので、業務から派生する研究を行い、論文にまとめるようにもしているそうだ。

副作用早期発見のマネジメントには患者の変化を早期に、かつ正確に捉えることが重要となる。チーム医療の中で、医師や看護師とは異なる視点で、「患者さんの変化を薬との関連性で紐づけするのが薬剤師の役割です」と伊東氏は説明する。その専門知識とスキルは病院の薬剤師のみならず、地域医療を担う薬局薬剤師にも求められている。そこで同病院薬剤部では2014年3月から大分県内の薬局薬剤師を対象とした「フィジカルアセスメント講習会」を開催している。

実技を重視した フィジカルアセスメント講習会

フィジカルアセスメント講習会は今年で開講から5年目を迎え、これまでに計197名の薬局薬剤師が講習を受けた。実技に重点を置いているため、1回あたりの参加者は20名を目安としている。講習会は年2クール開催しており、フィジカルアセスメントの基本手技の修得と領域別のフィジカルアセスメントと副作用について、計10テーマを履修する(表1,2)。1日に2テーマずつ5回。各テーマは講義が10分、実技が50分のスケジュールで行う。講師は同病院の各診療科の医師が担当している。

「講習会では脈拍や血圧などバイタルサイン測定の基本から学習していきますが、なかでも問診のスキルは副作用マネジメントにはとても重要です」と伊東氏

はいう。「お変わりないですか」と聞くと「別にないです」と答える患者でも、「脚がむくんだりしませんか」と具体的に聞けば、「そういえば夕方になると時々…」という具合で、コミュニケーションの取り方次第で得られる身体情報が違って来るからだ。

講習会は同病院薬剤部と大分県薬剤師会との共催で実施している。フィジカルアセスメントの講習会や研修会はいまや全国各地で行われているが、大学病院の薬剤部が主催しているケースは多くない。というのも、大分県には薬学部をもつ大学がなく、大分大学医学部附属病院が県内で唯一の大学病院であり、実技を学ぶことができる設備を整えているのは同病院しかないという実情がある。実際、講習会の実技は、医師の研修に使われる同院のスキルラボセンターで、呼吸音聴診シミュレーターなどの機器を使って行っている(写真)。シミュレーターの使用や資料の準備等にかかる費用、講師への謝礼などの運営費は県薬剤師会が現在は負担している。

講習会受講後は実践例が増加

講習会の成果を把握するため、伊東氏らは全10テーマに参加した講習会修了者47名を対象にアンケート調査を行った。修了者は40代が最も多く、薬剤師経験が15年以上の人が4分の3を占め、「経験を積んでいる人が多かった」。その理由の1つは、大学の薬学部の授業でフィジカルアセスメントが最近では取り入れられるようになってきているため、4年制の教育を受けたベテランの関心が高いということがあるようだ。

講習会への参加理由を尋ねたところ、「ほとんど経験がなかったから」「患者と接する上で役立つ」「在宅等の場で有効」「副作用発現の確認に必要」など、「保険点数のためというよりは自分のスキルアップのためにやろうという人が多い」(伊東氏)ことがわかる。

講習会の満足度を尋ねると、「満足」と回答した人が9割弱を占めていた。自由記載でも「実技が大変役立った」「診察の方法を具体的に見たり聞いたりできて参考になった」との回答があった。

次に、日常業務で実際にフィジカルアセスメントを実施しているかを尋ねたところ、講習会の受講前には2

表1 フィジカルアセスメント講習会開催方法

会期：2014年3月～2018年3月 計40回
(1年間に10テーマを2回ずつ)
対象：大分県内の薬局薬剤師
方法：1日2テーマ(1テーマ：講義10分+実技50分)
講師：大分大学医学部附属病院各診療科医師10名
内容：フィジカルアセスメントの基本手技の習得
領域別のフィジカルアセスメントと副作用

	テーマ	講師
1	フィジカルアセスメント基本手技とその異常①	総合内科・総合診療科
2	フィジカルアセスメント基本手技とその異常②	総合内科・総合診療科
3	呼吸器領域のフィジカルアセスメントと副作用	呼吸器・感染症内科
4	循環器領域のフィジカルアセスメントと副作用	循環器内科
5	神経精神系領域のフィジカルアセスメントと副作用	神経内科
6	消化器領域のフィジカルアセスメントと副作用	消化器内科
7	腫瘍・血液領域のフィジカルアセスメントと副作用	腫瘍・血液内科
8	内分泌代謝領域の副作用	内分泌代謝内科
9	膠原病・腎臓領域のフィジカルアセスメントと副作用	膠原病・腎臓内科
10	漢方薬の副作用	総合内科・総合診療科

表2 フィジカルアセスメント講習内容

1. フィジカルアセスメントの基本
 - ・医療面接(問診など)
 - ・呼吸(呼吸数、パルスオキシメーター)の確認
 - ・血圧(水銀血圧計：コロトコフ音等)の測定
 - ・脈拍(徐脈、頻脈、不整脈、足背動脈の触知、家庭用の心電計等)の測定
 - ・体温の測定
 - ・意識レベルの確認(JCS)
 - ・身体診察(視診、聴診、触診)
 - 1) 頭頸部および顔面
 - 2) 胸部(呼吸器系)の診察
 - 3) 胸部(循環器系)の診察
 - 4) 腹部の診察
2. 副作用モニタリング

呼吸音聴診シミュレーター(Mr.Lung)、聴診器、心電図等を使用

名(4.4%)であったが、受講後は10名(22.2%)に増え、血圧測定や脈拍測定、聴診が行われていた。なかには気管支拡張剤の経皮吸収型製剤を使用中の患者の頰脈に気づき、医師に報告したところ処方変更となったケース



フィジカルアセスメント講習会では実技の修得に重点を置いている。血圧測定（左）、呼吸音聴診シミュレーターを使った聴診（右）の実習。

があった。また下剤を服用しても排便コントロールが不良だった患者に腹部聴診を行い、蠕動運動音が弱いことを医師に報告した結果、大腸刺激薬が処方されたケースもあったという。

医師と薬剤師の交流の場にも

講習会の実施は、フィジカルアセスメントを学ぶという本来の目的以外に、「講師の医師と受講者の薬剤師が交流できるというメリットがあります」と伊東氏は話す。薬剤師にとっては医師に聞いたかったけれども聞けずにいたことを聞く良い機会になっている。院外処方箋に表示された検査値の見方や処方意図などを医師から一対一で教えてもらう場面も見られるという。また医師にとっても電話だけでは伝えられなかったことを直接話す機会にもなっている。

また当日は病院薬剤部から主任クラスの経験を持った薬剤師が出席し、医師や薬局薬剤師からの質問に対応する。一方で、薬剤部の新卒の薬剤師も講習会に参加してフィジカルアセスメントを勉強している。

講演会の開催は、県内の遠隔地からも参加してもらうために、病院や薬局が休みの日曜日に設定している。年間合計10回の講演会を開催するにあたり、講師やスタッフを確保する日程調整が難しいのが大きな悩みどころだという。

現場でのフィジカルアセスメントの普及が課題

2018年度診療報酬改定では、かかりつけ薬剤師の役割がより一層評価されている。医薬分業のもと、副作用チェックをはじめとした薬物療法の管理はこれまで以上に薬剤師が担うべきものになりつつある。「これからはどこでも処方箋に検査値が表示され、必要に応じて薬剤師が処方提案するなど、薬剤師の責任が問われる時代になってくると思います」と伊東氏は話す。それに対応するには薬効と副作用を見極めることのできる薬剤師としての技能を高める必要があり、フィジカルアセスメントがその1つのステップになる。

これまでに、大分県薬剤師会会員全体の1割強がこのフィジカルアセスメント講演会に参加したことになる。「今後さらにフィジカルアセスメントの必要性を理解してもらい、参加を促していきたい」と伊東氏。それと同時に、講習会での講義と実技が日常業務でいかに使われているかを検証して、より現場で生かせる内容にしていくこと、さらには在宅医療でも活用してもらうことが課題だとしている。

最後に、伊東氏は「フィジカルアセスメント講習会や処方箋への検査値の印字などを通し、病院薬剤部と地域の薬局との連携を強め、良い関係を築きながら、お互いのスキルアップをしていきたい」と抱負を語られた。